

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第 卷二十五第

月六年六十和昭

哀辭 故山本博士遺影及署名

## 論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

## 時論

重慶政府の戦時物價政策……………十龜盛次

## 記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

## 末廣重雄

山本博士と筆者とは、明治四十五年より經濟學部が法學部から分離獨立した大正八年まで、一緒に法學部に勤務したのであつたが、同年後は學部を異にするやうになつた。けれども、博士の専門とせられたのが植

民政策であり、筆者は移植民問題に少なからず興味を持つてゐるから、機會ある毎に同問題について、博士と意見の交換をしたり、議論を闘はしたことがあつた。

斯くして、多年に亙り親しい交際を續けたから、過日博士が溘然逝去せられたことは、實に痛惜の情に堪へない。茲に經濟論叢の紙面をかりて、少しく博士の思ひ出を述べたい。

今より三十有餘年前のことであるが、米國や英帝國内の自治領に日本人排斥の暴舉があつた。英帝國のことは暫らく措き、米國が其の太平洋沿岸諸州の開發につき偉大なる功勞のあつた日本人に、甚しい迫害を加へたことは、恩を仇で返す仕打ちであつて、正に狡兎死して走狗煮らるゝの感があつた。その後十數年間日米國交は移民問題を繞つて紛糾し、遂に一九二四年の改正移民法によつて、米國は我國を含む亞細亞諸國の移民に對して全く其の門戸を閉鎖してしまつた。此の重大なる差別待遇の排撃に關して、筆者は大體に於て博士と主張を同ふしたのであつた。

今次の戦争が英國側の敗北に終る場合には、戦後の世界平和確立の爲に、來るべき平和會議（米國も參加するとして）に於て、謂ゆる人種平等を兩國に承認せしめなければならぬ。筆者は昨年末から、斯かる主張を爲しつゝあつて、戦争終了のときまでに、大に國論を喚起したいと考へてゐるが博士の逝去によつて有力なる援助を失ふたことは遺憾千萬である。

日本移民問題については、右の如く筆者は博士と觀るところ、感ずるところを同ふしたが、日本人の滿洲國移住に關しては意見の齟齬するを免れなかつた。

昭和十二年に始まり向ふ二十箇年間に我國より百萬戸の開拓民を滿洲國に入植せしめんとする大計畫に關しては、博士は其の前途を頗る樂觀せられた。此事たる滿洲國の産業開發に大に寄與するばかりでなく、北方に對する國防の充實並治安の確保の必要に基く重要な計畫たるの故を以て、日滿兩國政府に於ては力癩を入れ、巨額の國帑を費して、開拓民に保護獎勵を加へるのであるから、過去に於ける内地人の朝鮮移住などとは目を同ふして語るべからざるものがある。成功疑なしと強調せられたのであつた。

然るところ、筆者は此の問題に關しては必ずしも博士と見るところを同ふすることが出来なかつた。一般的にいへば、移植民が生活水準の低きところから高いところに向ふのは恰も水の低きに就くやうなものであるが、生活水準の甚だ低く、しかも勤勉なる支那移民

が、現に多く居住し、今後も次第によつては多數入植することあるべき滿洲國に、生活水準の高い日本人が入植するのは、恰も水を高處に上るやうなもので、中々困難がある。そして、現在の大計畫は莫大なる經費を要するのであるから、果して其儘完全に實行することが出来であらうか。縦し、實行可能としても、日本開拓民は滿洲國を墳墓の地として茲に定着するやうになるであらうか。成功の見込確實とは云ひ難いと考へ、博士と論議を重ねたのであつた。

滿洲國の開拓大計畫の實行に着手してから、今年までに僅かに四年、博士は其の結果を見るを得ずして、今や白玉樓中の人となられた。筆者も齡既に古稀に近く、餘命久しくはないから、兩人にとりては、同計畫の成否如何を知る機會は永久に無いのである。が、筆者は我國の爲、同計畫が博士の豫斷通り大成功を收め、滿洲國の進歩發展、東亞新秩序の建設に多大の貢獻を爲し得ることを祈つて已まない。